

第 12 回 (12/12) 現代社会学 2 : 消費文化と郊外社会

1. 連絡・報告

前回欠席の人： 授業レジュメ（第 11 回～第 15 回）は授業 HP に *レジュメ末尾に URL

2. 「郊外」のイメージ

<郊外社会の特性> 千葉県我孫子市の例より（小田 1997: 59-60 頁）

- * 東京から 30～40 キロ圏に位置する。
- * もともとは農業地帯である。
- * 1970 年以後、団地建設等によって急速に人口増加。
- * 新しい鉄道の開通と乗り入れ。
- * 人口流入によって旧住民は少数派となり、新住民が過半数を占める。
- * 若年人口率が非常に高く、老人が少ない。小中学生のいる核家族の増加を示す。
- * 流入人口は都心に通うサラリーマンが多く、ベッドタウンである。
- * 流入人口によって産業構造が変わり、第三次産業就業者が 6 割を占める。したがって第一次産業から第三次産業の社会に変化している。第二次産業は横ばいか減少。
- * 持ち家率が高いわりには定住意識にゆらめきがみられる。
- * 商業立地は駅前商店街を中心としているが、飲食店、小売店の増加にもかかわらず、住民の需要を満たしていない。

「町田は、昭和 40 年代にものすごく団地ができました。多摩ニュータウンに団地ができる以前に、町田では鶴川団地とか藤の台団地とか団地がたくさんできて、東京のベッドタウンという言葉がよく使われるようになりました。（中略）

そして今や、そういう領域は埼玉とか千葉とか茨城に広がっています。たとえば茨城県の土浦やつくばは、上野駅から常磐線で 1 時間です。あのあたりの不動産の広告を見ると、必ず都心へ何分と書いてあります。この場合、都心とは土浦の中心部のことではありません。水戸でもないわけです。茨城県なのだから水戸でもよさそうなものですが、そのようには書かれていない。なぜかという、新しい不動産物件を買う人たちは、東京に勤める人が多いからです。実際、朝、常磐線に乗ってみると、牛久や土浦から東京に勤務している人がたくさん乗ってきます。柏や松戸で満員になります。つまり、行政レベルでは、茨城は東京と別個になっていますが、生活をしている人の生活圏の広がりが社会の単位だと考えれば、茨城は東京です。牛久や取手の田んぼの真ん中にぽつんと郊外住宅が建っている風景を見ると、そこは東京の出張所だと思います。それが面的に広がっていくと、そうした場所に「神奈川都民」「千葉都民」「埼玉都民」と言われるような人たちが成立していく。つまり、寝る場所はそこだけれども、意識としては東京という社会に属している人たちです。このようにして、東京の郊外はどんどん広がってきているわけです。」（若林 1999: 15 頁）

「郊外社会」は全国的現象（cf. 各県の県庁所在地・地方都市近郊）

3. 「郊外」前史

* 1950年代、郊外化する以前の村の「原風景」

「1950年代、私は村に生まれ、村に住んでいた。村の生活は、戦後とはいえ戦前から続いていた生活様式のなかで過ぎていた。おそらくは稲作を中心とするアジア的農村共同体の典型的な生活様式。人口は200人足らず。世帯数は30余。村の住民はほとんど全員が農業を営んでいた。村はまぎれもない農村共同体だった。

戦前に建てられたと思える藁葺きの家がまだ何軒もあり、いずれも大家族だった。4世代同居はあたりまえで、年寄りのいない家はなかった。それでもそれぞれに役割があり、漫然と過ごす人はいなかった。家畜も多く飼われていた。牛、豚、どの家にも鶏小屋があった。子どもたちも家で生まれ、老人たちも家で死んだ。貌の見えない村人はいなかった。家族構成、家屋構造、縁戚関係、経済状態といったすべてを了解したうえで成立した、農業を基盤とした生産共同体だった。大人たちはその共同体の内部ともいべき田や畑で働き、子どもたちも当然の、ごとく村から出ることなく暮らし、遊んだ。大人には大人の生活があり、子どもには子どもの生活があった。(中略)

誰もいない冬の日当たりのよい家の縁側でひとりぼつねんとして、自分もまた親たちと同じようにこの村のなかで何も変わることなく暮らしていくのかと思うと至福のように感じることもあったが、閉ざされたこの村で一生涯を過ごすことになにかしれない恐怖を覚えることもあった。」(小田 1997:6-12頁、下線榎本)

4. 東京圏の推移：「郊外」の誕生

高度経済成長期（1955～1973年）

産業構造の転換：農耕社会から重工業社会へ

日本社会全体での急激な人口増加、人口移動、都市への人口集中

<東京圏の都市の成長と衰退> (佐貫利雄『成長する都市 衰退する都市』)

1960～1965年

成長： 東京23区、熊谷、武蔵野、横須賀、小田原

急成長：川越、浦和、川口、大宮、千葉、市川、船橋、松戸、八王子、立川、三鷹、府中、調布、小平、横浜、川崎、平塚、鎌倉、藤沢、茅ヶ崎、相模原

1975～1980年

衰退： 東京23区、武蔵野、三鷹、小金井、小平

停滞： 熊谷、立川、調布、川崎、鎌倉、小田原

成長： 川口、浦和、大宮、新座、川越、上尾、草加、越谷、習志野、千葉、市川、船橋、木更津、市原、府中、東村山、東久留米、町田、日野、横浜、横須賀、平塚、茅ヶ崎、大和

急成長：所沢、春日部、狭山、入間、松戸、佐倉、柏、流山、八千代、我孫子、八王子、相模原、秦野、厚木

東京圏の推移 1960-2000

- 地域特性区分
- 人口増加率
- 年少人口比率、生産年齢人口比率
- 団塊世代比率

5. 近代日本の都市住宅事情：nLDK の誕生

終戦直後の住宅事情

- 圧倒的な住宅不足（全国で 420 万戸不足）
-

↓

「51C」：公営（都営・府営・市営・町営・村営）住宅の平面間取り図の 1951 年の C 型

- 2DK の原型
-

「51C」設計の前提条件

限られた狭い面積（35 m²）において

- ①
- ②

↓

「食事もできる台所」：ダイニング・キッチン（DK） ← 苦肉の策

- 1 部屋を壁で囲い独立性の高い部屋にする
- 台所を少し広げて食事もとれるようにする
- 台所と、もう 1 部屋はつなげて使えるようにする
-
-

6. 近代家族と nLDK

Q: この住宅の型が、なぜかくも画一的に受け容れられていったのか

DK, LDK の空間的意味

-
-

「家父長制」を基本とする大家族制

- 家父長（戸主権）の強さ
- 先祖祭祀の義務
- 家父長による家族の扶養義務
- 家督相続における直系卑属男子優先の原則
- 家長以下 3 世代が同居する拡大家族

「橋の論理」：公営住宅供給の位置づけ

地方から都市への若年労働者の大量移動

2DK という限られた面積

夫婦と若年の子からなる核家族

家族人数は 2~4 人

↓

- 公営住宅に居住するのは、人生の一定期間だけであり、いずれ引越しをして移住する。公共住宅はその掛け渡しの「橋」の役割をするだけ
- 「終の棲家」は、庭付きの一戸建て住宅

7. 住宅産業の成立

戸建住宅が立ち並ぶ郊外住宅地の風景

住宅産業の成立

- プレファブ住宅
- ツー・バイ・フォー住宅
- アルミサッシ、鉄骨造、鉄筋コンクリート（RC）造

住宅生産の工業化の流れ

↓

均質的な住宅地の風景

nLDK の空間形式そのものは、「終の棲家」においても定着していく

↑

日本の家族のあり方、家族制度

-
-
-

8. 「団地」の供給：日本住宅公団の設立

* 住宅環境の状況

「国勢調査」のデータ

1955 年（持ち家）

1 世帯当たり畳数	22.4 畳
1 世帯当たり人員	5.42 人
1 人当たり畳数	4.1 畳

1955 年（借家）

1 世帯当たり畳数	11.8 畳
1 世帯当たり人員	4.14 人
1 人当たり畳数	2.8 畳

1965 年（借家）

1 世帯当たり畳数	10.9 畳
1 世帯当たり人員	3.11 人
1 人当たり畳数	3.5 畳

「大都市住民の住生活をささえているのは、マンションでもなく分譲住宅でもなく、木造賃貸（木賃）アパートとよばれる 6 畳 1 間ばかりの民営借家である。たとえば総理府の調査によると、昭和 43 年（1968 年）現在、東京の住宅の 38% は木賃アパートで、都民の 25% はその住民である。5 年前（1963 年）は、それぞれ 29%、18% にすぎなかった。」（早川和男「木賃文化の克服」『東京百年』第 6 巻、榎本補足）

↓

日本住宅公団の設立（1955 年） → 賃貸住宅の大量供給

- 「51C」を原型とする 2DK 形式の住宅が標準住戸として採用される
- 「団地」：2DK を階段室を挟んで並べ積み重ねるという集合住宅形式
- 「2DK の団地、ステンレスの流し台、テーブルと椅子での食卓、スチール製ドア、シリンダー錠…」が憧れの対象 cf. 「花の団地族」
- DK が日本の近代住宅のシンボルに

* 公団住宅居住者の典型像

「戦前の生まれで、地方出身者。高度成長期によりそうように生き、サラリーマンとしては会社で比較的恵まれた位置にいる。結婚して都心の木造アパートか社宅にいたが、子どもが生まれたため新しい住生活と環境を求めて移り住んできた。これまでと比べて、会社までの通勤時間はかかるが、高倍率にもかかわらず入居できて幸運だった。しかし住居の形態からいって子どもは二人以内だろう…」（小田 1997: 41 頁）

都市への流入

間借り・寮 → 木賃アパート → 団地 → マイホーム（マンション・一戸建て）

（結婚）

（子供出生）

住居形態を変化させるたびに都市の外側へと拡散

食寝分離の実現 →公私の分離

住居内における家族団らんの場としてのリビング（居間）＝「L」の確保

DK から LDK へ

「モダンリビング」（L）が日本の近代住宅のもうひとつのシンボルに

9. 郊外住宅地開発プロセス

郊外住宅地開発の特徴

第1期（1955～1965年）：大規模住宅地開発の創成期

-
-
-

第2期：大規模住宅地開発の隆盛期

-
-
-

第3期：大規模住宅地開発の急減

-
-

第4期：（1990～）

-
-

10. 事例：多摩ニュータウンの変遷

東京都八王子市・町田市・多摩市・稲城市にまたがる多摩丘陵に計画された日本最大規模のニュータウン

沿革

1963年、開発計画決定

開発主体：住宅・都市整備公団（都市再生機構）、東京都、東京都住宅供給公社

1971年3月26日、多摩市諏訪地区・永山地区において第1次入居が開始

1974～75年、小田急多摩線・京王相模原線、多摩センターまで開通

2005年、都市再生機構（旧住宅・都市整備公団）による開発すべて終了

新旧住民間の摩擦

古くからの住民（旧住民）と新住民がどのように共同体を形成していくのか

- 道路建設をめぐる住民運動（1970 年代）

↓

- 行政主導によるまちづくり、新しい祭り、地域イベント（1980 年代）

↓

- オフィス街や商業・文化センターの形成（永山駅・多摩センター駅周辺）

11. 演技するハコ

ショートケーキハウス

出窓と小人

クリスマス・イルミネーション

ガーデニング

- 「見せる」ための装飾・演出
- そこに暮らす人びとの「個性」が展示される「個展」の場

↓

商品化され、マスメージ化されたアイテムのなかから選び取られる「似たような個性」
虚構の「演出」が、ひとつの「現実」として生きられるものになる

「非日常の虚構によって関係付けられた『物』が、日常の現実を包み込み、それによって日常の現実が空洞
となっていることが隠ぺいされている」（片木篤「個室のユートピア」）

12. 「郊外」のバリエーション

①「国道 16 号的」な郊外

e.g. ファミレス、ショッピングセンター（ジャスコ、ヨーカドー）、コンビニ、
ファストフード、レンタルビデオ・ショップ、ロードサイドショップ

- 自動車による移動を前提とした消費空間
- 駅前商店街のような歴史性のある消費空間を解体

②「青葉台 - シーサイド的」な郊外

- フィクショナルに空間が整備された地域
- 似たような階層に属する人びとが、似たようなライフスタイルを実践するために作られたテーマパーク的郊外
- 文化資本も経済資本も同じくらい所有している人びとが互いに微小な差異を見せ合い、総体として「夢のライフスタイル」を再生産していくテーマパーク

13. 郊外形成の社会的意味

cf. 「あすみが丘」 (千葉県) の平均購入者像

平均価格：5,200 万円 (土地 183 m²、建物 127 m²)

平均年齢：43 歳、年収 900 万円

夫婦と子どもの核家族世帯 7 割

平均家族人数：3.4 人

通勤先：7 割が東京

主婦の有職率：2 割弱

* 階層的均質性：

①

e.g. パチンコ店建設反対運動

②

③

14. 郊外社会： 居住地域としての特性

①

②

③

「共通の場」 (コミュニティ?) というものの不在

共同性の不在 (死を共有する場) と、小さな共同性 (家族) の実在

↓

④

「…ここでは同じような生活パターンが供与され、それは共通しているのではないかという思うようになる。そして、共通性のなかにぼんやりとふたたび共同性のようなものが見えてくる。同じ共通の運命をここで生きているという共同性に転化していくわけです」 (内田隆三、若林編 2000:199)

⑤

15. 郊外の「社会」

*

「共同体 (community)」から「集まり (gathering)」「群衆」へ
血縁や地縁から切り離された新しい生活、自由 (互いに見知らぬ関係)
空間 (地域) を共有してはいても、互いに孤立して生活

↓

-
-

*

(ベッドタウンの宿命)

①

通勤、通学 (学区制のある小中学校以外)、娯楽や「ショッピング」のために都心へ出かける…

②

↓

生活圏・活動圏を異にする人びと

家庭内の共同性も相対的に希薄 (e.g. 家族成員それぞれの生活時間帯がバラバラ)

cf. 隣近所の人よりも、遠くに住んでいる人の方が身近で親しい

↓

必ずしもコミュニティをつくらないで移動を常態として暮らしている場所

(共同性そのものは不変)

16. 郊外社会における規範

「赤の他人」どうしが暮らす社会 = 「世間」のない空間

↓

↓

規範の希薄化

-
-

「友達文明」「子ども中心社会」

- 親や教員（支配 - 被支配関係、上下関係）の権威凋落
- 抑圧的な態度をとって子供に反抗されるより、優しい大人を演じて子供の機嫌をとる方がラク
- 他人の子供を叱らない
- （地域社会によってではなく）ただ親だけによって育てられるようになった子ども

17. 地方社会における郊外化

<かつての地方社会>

- 限られた親密な人びとを中心とする共同体（「世間」）
- 商業・娯楽施設の数は限られる、夜間営業の店舗は少ない
- 限られた移動手段 → 個人が行動する時間・空間が狭い

↓

①

- フォーマルな人間関係のもとでの買い物行動
- 全国的に均質化された商品・サービス
- 生活スタイルの夜型化
- 深夜勤務・休日勤務の仕事生活（従業員関係者）

②

- 時間・空間の制約が薄れる
- 人間関係のパーソナル化（コミュニケーションをしているかどうかは当の参加者どうしにしかわからない）

③

- 1家1台から1人1台へ
 - 整備された道路網
 - 移動手段のほとんどをマイカーに依存、公共交通機関利用されず
- cf. 地方大学の学生生活の実情

↓

-
-
-
-

18. 「ファスト風土化」

大都市圏だけでなく日本中のどんな田舎にも進出 →日本人の生活から地域差が縮小

ファストフード：マクドナルド、モスバーガー、ケンタッキー、ミスタードーナツ…

ファミレス：すかいらーく、デニーズ、ロイヤルホスト、サイゼリヤ…

大型スーパー：ジャスコ、ダイエー、イトーヨーカドー、西友…

コンビニ

「ファスト風土化」 (三浦)

-
-
-
- (ファストフードに象徴されるような)

↓

日本全国の地方の生活が均質化。その地方の独自性、固有の性格が消失

昔からのコミュニティや街並みが崩壊

人びとの生活、家族のあり方、人間関係のあり方がことごとく変質

19. 「マイルド・ヤンキー」というライフスタイル

20. 引用・参考文献

倉沢進・浅川達人編、2004、『新編 東京圏の社会地図：1975-90』 東京大学出版会

小田光雄、1997、『<郊外>の誕生と死』 青弓社

宮台真司、1997、『まぼろしの郊外——成熟社会を生きる若者たちの行方』 朝日新聞社

三浦展、1999、『「家族」と「幸福」の戦後史——郊外の夢と現実』 講談社現代新書

三浦展、2004、『ファスト風土化する日本：郊外化とその病理』 洋泉社新書 y

若林幹夫ほか 2000、『「郊外」と現代社会』 青弓社、第5章

若林幹夫、2007、『郊外の社会学：現代を生きる形』 ちくま新書

原田曜平、2014、『ヤンキー経済 ——消費の主役、新保守層の正体』 幻冬舎新書

原田曜平、2016、『パリビ経済 ——パーティーピープルが市場を動かす』 新潮新書

東浩紀・北田暁大、2007、「青葉台から郊外を考える」『東京から考える：格差・郊外・ナショナリズム』 NHK ブックス

布野修司、2006、「nLDKの誕生：近代日本の都市住宅事情」新谷尚紀・岩本通弥編『都市の暮らしの民俗学 3 都市の生活リズム』 吉川弘文館

上野千鶴子、2002、『家族を容れるハコ家族を超えるハコ』 平凡社

阿部謹也、1995、『「世間」とは何か』 講談社現代新書

21. 次回の予告

12月19日 現代社会学3：人間関係と「自由」

以上

【授業HP】 <http://t-enomoto.la.cocan.jp/komajo/>

DKの誕生

終戦直後の住宅事情

- 圧倒的な住宅不足(全国で420万戸不足)
- 短期間に大量の住宅をどのように供給するか



「51C」: 公営住宅の平面間取り図の1951年のC型

- 2DKの原型
- DK(ダイニング・キッチン)という日本独特の空間

「51C」設計の前提条件

限られた狭い面積(35m²)において

- ①「食べる場所と寝る場所を分ける」(食寝分離)
- ②「寝室を分ける(2部屋確保する)」(隔離就寝)

「食事もできる台所」: ダイニング・キッチン(DK)

- 1部屋を壁で囲い独立性の高い部屋にする
- 台所を少し広げて食事もとれるようにする
- 台所と、もう1部屋はつなげて使えるようにする
- 都市における若い勤労者夫婦からなる核家族を想定
- 共働きが多い → 朝食は簡単にとれればいいのか

DK, LDKの空間的意味

- 日本住宅(古い家族関係)の封建制を象徴する玄関、床の間などの排除
- 家事労働軽減の空間的提案

nLDKの空間形式

nLDKの空間形式そのものは、「終の棲家」においても定着していく



日本の家族のあり方、家族制度

- 家父長制に基づく大家族から近代家族(核家族)の自立
- 家族という制度からの個の自立
- 高度成長を支える産業システムの編成(労働力再生産の仕組み)

第1期(1955～1965年): 大規模住宅地開発の創成期

- 住宅公団などの公的ディベロッパーによる
- 賃貸住宅
- 東京西郊(多摩ニュータウンなど)

第2期:

大規模住宅地開発の隆盛期

- 民間不動産企業による開発
- 開発の遠隔化、大規模化、宅地分譲
- 神奈川県（横浜～横須賀、多摩田園都市など）

第3期:

大規模住宅地開発の急減

- 建売分譲が主流
- 埼玉・千葉がメイン地域に

第4期:(1990～)

- バブル崩壊後の地価下落
- 都心回帰傾向

演技するハコ

- 「見せる」ための装飾・演出
 - そこに暮らす人びとの「個性」が展示される「個展」の場
- ↓
- 商品化され、マスイメージ化されたアイテムのなかから選び取られる「似たような個性」

郊外形成の社会的意味

- 階層的均質性：上層のミドルクラス、夫婦と子どもからなる核家族世帯
 - ① 異質性排除
 - ② 階級的排他性
 - ③ ジェンダー不平等

郊外社会：居住地域としての特性

- ① 住民の均質性（社会階層）
- ② 住民：空間の消費者（空間全体を支配しているモードを消費）
- ③ 理想的な都市計画のもたらす歪み
（清潔・安全・便利・快適、緊密な空間設計）
快適性を求める欲望 「あれも欲しい、これも欲しい」
- ④ 抽象的な共同性の感覚？
- ⑤ 「個人」をベースとした共同性？